

MBA と英語 江川雅子氏講演会

教養教育開発機構開発部門では、平成 17 年 6 月 14 日にハーヴァード大学の日本リサーチセンター長の江川雅子氏による講演会「MBA と英語—駒場でどのような英語を身につけるか」を催しました。本講演会は開発部門のクリティカル・ライティング・プログラム(CWP)の創設記念として企画されたものです。

江川氏は 1980 年に東京大学教養学部教養学科（国際関係論）を卒業後、シティバンクでの勤務を経て、ハーヴァード大学ビジネススクールに入学し、1986 年に MBA を取得しました。その後、ソロモン・ブラザーズのニューヨーク本店・東京支店での勤務の後、SG ウォークに入社し、主に M&A、エクイティ・ファイナンスなどの投資銀行業務に従事されました。現在はハーヴァード・ビジネススクールがアジアに設立した拠点のひとつである日本リサーチセンター長として活躍されています。

江川氏の講演ではハーヴァード大学のビジネススクールの様子と英語学習に焦点があてられました。ハーヴァード大学のビジネススクールは一学年 900 名が、90 人単位の授業にわかれて教育を受けます。90 名とはずいぶん多い感じがします。しかし各学生と教員同士が親密な関係をもてるよう、教室は馬蹄形にデザインされ、発言者の顔が全員に見えるような仕組みになっています。また教員は各学生のプロフィールを事前に学習することが求められます。90 名の学生と教員が週に複数回、年間を通して授業で接するため、相互交流が盛んな密度の高い授業が可能になります。



授業は主にケースメソッド（さまざまな企業に関するケーススタディ）が中心です。毎回の授業用に特定の企業のレポートが 25 ページ程度にまとめられていて、学生は事前にそれを読み、企業の問題点や将来性について語り合います。25 ページ程度では何もわからない、という指摘もありますが、むしろ限られた情報のなかで多様な選択肢を見抜く眼を持つ将来の企業幹部を育てるのが、ハーヴァード・ビジネススクールの目標なのです。

授業はたいへんに厳しく、下位 10%は毎年放校処分となります。とうぜん、競争激しいものがあります。

このようななか、日本からの学生は授業の難しさのみならず、非母語で授業を履修するという困難にも立ち向かわなければなりません。江川氏も入学当初は、教員の講義にはなんとかついていけたものの、学生同士のディスカッションになると何がなんだかわからないこともあったそうです。とりわけ読み書きについては苦労したそうです。

苦労する過程で江川氏が再認識したのは、語学学習法に近道はないということです。基本をきっちりと積み上げる地道な努力が重要なのです。江川氏は中学、高校時代から地道に努力して積み上げてきた英文法などの基礎知識を思い出し、活用することで、少しずつ語学のハンディを乗り越えました。とにかく、できるだけ多くを聞き、間違いを恐れずに



話すこと。そして興味を持てる分野のリーディングを大量にこなし、そのようなことについて自分なりに英語で書いてみる。そのような当然の努力を日々積み重ねることが語学習得には不可欠であると江川氏は指摘しました。

江川氏が述べた英語学習法は、今日大量に氾濫する英語教育論と比較するとずいぶんとオーソドックスな感じがします。しかしそれがむしろ斬新でした。語学習得というのは一朝一夕にできるものではないというのは、安易な語学学習法の誘惑に囲まれている学生たちへの新鮮な警鐘にもなったのではないのでしょうか。

また、語学はあくまで大きな夢を実現するための手段であるという江川氏の指摘も有益でした。世界で活躍するための有効なツールとして英語を学習すべきだという意見は、ともすると語学至上主義に陥りがちな英語学習者が忘れてはならない基本点です。さらに江川氏は語学というのは継続的な成長がみられものではなく、しばらくのあいだ停滞が続いた後に、突然大きく進捗するものであると指摘しました。この点も、即効的な英語教育効果を求める今日の状況を正す指摘でした。最後に江川氏は機械翻訳・通訳の問題点を指摘しました。語学というのはあくまでヒューマン・コミュニケーションの道具であり、機械に任せるのは限界があります。やはり個人が最大限の努力を学生時代に行うことが肝要です。

江川氏の講演会は主催者の予想をはるかにうわまわる出席者数（139名）でした。その大半は教養学部の1年、2年生でした。講演会後には次々と質問が続き、途中で打ち切らざるを得ないほどで、大盛況のうちに終わりました。

